

江戸時代の外国人も、鰻好きの人も通った、そして令和のあなたも通る日光街道！

シビック・プライド越谷新聞

第7号・令和8年10月1日・旧日光街道・越谷宿を考える会＊越谷のシビックプライドを楽しむ会・

☆初めて日光街道を通った外国人は＜朝鮮通信使＞

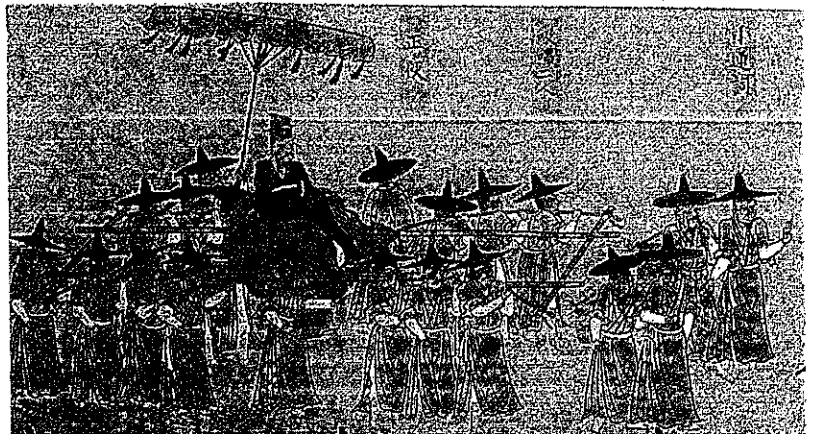
家康は江戸を本拠とし、利根川^{とうせん}東遷と荒川^{せいせん}西遷をしながら、江戸からの五街道、ヒト・モノが流れる「ミチ」をつくりました。越谷では「日光街道」です。

そして、秀吉時代に途切れた「日本・朝鮮」の交流が復活し、使節が江戸にやってきました。幕府は、その使節に家康の日光の墓への参詣を無理強いしました。寛永13年（1636）から3回にわたり、お行きいただきました。3回目の往路で、越谷で昼食を召し上がられた記録も残っています。（その後、江戸城内に東照宮ができ、日光行きは取りやめ）使節巡行の街道は、珍しい服装や音楽など、異国情緒たっぷりの行列で、沿道の人たちは喜んだことでしょう。

琉球の使節も、幕府や薩摩の圧力により、^{しょうほう}正保元年（1644）から3回、日光街道での参詣を行っています。

日光街道を通った最初の外国人は
「朝鮮通信使」でした。

お客様側約400人、出迎え側1000人位の行列だったようです。



通信使の行列（一部）「朝鮮通信使と江戸時代の人々」展
（天理ギャラリー第83回展）図録から 1989.5

☆ロシアの海軍軍医の妻エミリア

安政7年（1860）、初代のロシア・函館領事のゴシケーヴィチが江戸から任地函館に一行5人で向かう際、初めての夜を過ごしたのは、越谷宿の本陣（福井家）でした。同行した海軍軍医アルブレヒトの妻エミリアは旅行記に次のように書いています。

旅行の第1日目、江戸をあとにして、大きな街道に出て、やがて宿場に泊まりました。寒さでふるえながら駕籠からおり、くすぶって炭酸ガスのこもった農家に入るのだろうと想像しましたが、私たちに準備された部屋へ通されたとき、驚いてうれしくなりました。その部屋は十分な広さで、美しい壁紙が貼られ、家具さえ備えられていました。テーブルや腰掛という家具は、勿論大急ぎで集められたものですが、緋もうせんが掛けられていたおかげで、欠点は帳消しにされていました。～越谷のひとのやさしい思いが、ロシアの人たちに通じたのです～

☆ゴシケーヴィチはロマノフ朝ロシア帝国の外交官（1814～1875）

「安政7年のロシア領事奥州街道通行に関する三つの史料」清水 恵著

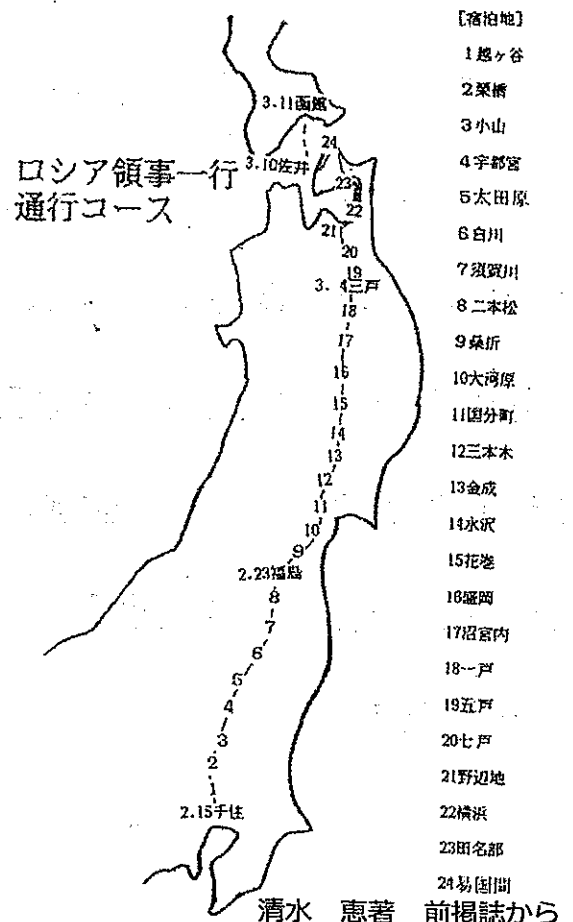
～地方史研究はこだて19号・函館市史へんさん室編刊1994.4

本件は、越谷市郷土研究会・金子 寛氏のご教示による。

この史料には5人の絵（領事・領事夫人・領事娘・下女・領事館員）が日本語による役職・推定年齢・推定身長とともに付けられています。右の絵には「領事娘」と書かれていますが、正しくは旅行記の作者の「エミリアさん」の絵のようです。



② エミリアさん像 前掲誌から



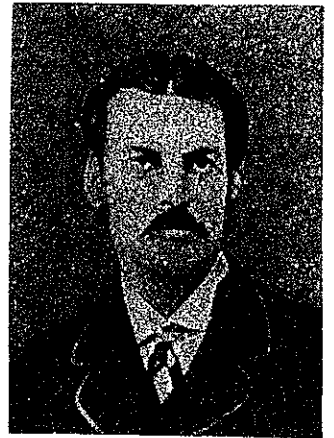
☆明治維新後に日光街道を歩いた外国人

○アーネスト サトウ

9時20分に公使館を出て、上野、山の下の茶屋を12時40分出発。千住へ。千住から草加にかけて、いくつかの村を抜けて行く道筋は非常に単調である。3時10分に磐城屋^{いわきや}へ到着。4時に出発、橋を渡った。綾瀬川と平行して走る道には松並木が続いている。途中でこの川を渡り、5時に越谷の入口に着いた。通りが長々と延びるが良い宿屋は一軒もない。町のはずれで川（元荒川）に架かる橋を渡り、大沢へ出ると玉屋という良い宿があった。

翌日は7時に徒歩で出発。8時50分に春日部の吉野屋へ到着し、9時10分にそこを発つ。 <日光案内記 明治5（1872）>

～サトウはスラブ系の姓で、日本の「佐藤」とは関係ない。イギリスの外交官。駐日英国公使。現在の英国大使館前の桜並木はサトウが植樹を始めたもの。法的には生涯独身であったが、武田兼^{さしものし}（指物師または植木職人の娘か）を内妻とし、3人の子どもをもうけ、認知しています。次男の武田久吉は植物学者。



アーネスト サトウ

○ギメとレガメ



昼食の給仕をする若い娘 レガメのスケッチ

パリにあって東洋系の美術品を数多く展示しているギメ美術館（いまは国立ギメ東洋美術館）を、自らの収集品を主としてつくった実業家・エミール・ギメ。明治9年（1876）に友人の画家・レガメと共に日光遊覧をしています。上野から人力車に乗り、昼食を食べたのは越谷の「うどんや」さんでした。そこで高下駄^{たかげた}をはいた若い給仕^{きゆうじ}さん、刺青^{いれずみ}をした人足さんなどをスケッチしたり、文章に残したりしています。生まれて初めて、パンとジャムを見て

感動し、それをもらって、すぐには口に入れられなかった女中さんは、日光の帰途に聞いてみたら、食べてくれていたので喜んだと書いています。



厨下をした人足(本文181頁)



ジャムつきのパンを見つける女

レガメのスケッチ
青木啓輔訳「ギメ東京日光散策・レガメ日本素描紀行」より 菱松堂出版刊S58.7

ギメは、政府からは「極東の宗教」についての調査を依頼されただけのことでしたが、友人のレガメを誘っての日本での行動は2カ月半の滞在で美術品900点以上、書籍1000冊以上を買い上げ、宗教調査も手を抜かない実績を上げていたのです。フランスに帰ってからも、5千年に渡るアジアの多様な文化・文明を紹介する博物館を創設、これはルーブル美術館の東洋部門を吸収するようなカタチで、いまの「フランス国立ギメ東洋美術館」の基礎をつくったのですから怖い。そんな方が私たちの越谷の「うどんや」さんで昼食を召し上がっていただいたことは、まさに越谷のシビック・プライドではないでしょうか。

そして、パリの国立美術館のお話から、いきなり、越谷の「鰻」のお話にうつるのですが～

○秋田藩・家老勤中日記 家老・今村大学筆 享保9(1724) ~^{ごしかや}越貝鰻茶屋に
殿様が立ち寄られ、家老始め御側廻りに鰻とお酒を下された。

○^{まつだいらさだのぶ}松平 定信 <8代將軍吉宗の孫。白河藩藩主で老中として寛政の改革を行なった>

4回、定信さんの旅日記に「まくりの里」が登場します。~

①19歳のとき 安永5(1776) 日記「霞の友」~まだ、日はなかば過ぎである。みな疲れたであろうと、まくりという里の茶店で休んだ。その茶亭の前に、古川が流れて、白鷺などが一、二羽、浅瀬で魚を獲ろうとしている様子は、実に趣がある。~

②寛政5(1793) 日記「^{こういん}甲寅の紀行」~いつも立ち寄るところである。この産のうなぎは、ことに味が勝れている。~



松平定信

③寛政8(1796) 日記「^{へいしん}丙辰の紀行」~まくりの里で休息した。この眺望はおもむきがある。~

④寛政10(1798) 日記「^{つちのえうま}戊午紀行」~あの、まくりの里のうなぎの味がすぐれているので、ここでしばらく休息しようと、人々が語り合うのは、実に風流の情がないものだと思えて腹を抱えて笑った。水野為長は別れを惜しんで、ここまで追いかけてきた。また、酒を酌み交わし、かのうなぎを食べた。このころ、私は病気にかかっていたが、いちだんとすばらしい味をめでて、酒も三杯つくした。~

○渡辺^{かざん}華山 田原藩（愛知県東部・渥美^{あつみ}半島）家老。藩が財政難に苦しむおり、

幼いころから絵を描く内職をしながら学問に励み、39歳で家老に就任。藩政改革に尽力、天保7～8年の大飢饉^{ききん}にも全国で唯一、餓死^{がし}・逃亡者を出さず、幕府から表彰されたこともありました。最初は儒学^{じゅがく}を学び、その後、蘭学^{らんがく}にも関心を深め、外国事情に精通する第一人者でもありました。目付・鳥居^{ようぞう}耀蔵などに睨まれ、蝨社^{ばんしゃ}の獄^{ごく}にまきこまれ、藩主に災いが及ぶことをおそれ、切腹して果てました。「絵画・鷹見^{たかみ}泉石^{せんせき}像」が国宝になっているのも有名です。

その渡辺華山の「全楽堂日録」に、越谷・間久里を通り、鰻を食べた記録が次の通り、残っています。（文政13年=1830）



鷹見泉石（古河藩家老） 渡辺華山筆〈国宝〉

～まくりという処に鰻をひさぐ家あり。これは小休とて、御駕^{かご}もとどめて御供^{おとも}の人々を息するなり。此家鰻名におひたる、都の人も尋来るなり～

賢人も、間久里の鰻を味わってくれていたのです。

☆ほかに、間久里の鰻を食べたヒト

※谷^{げんたん}元旦（画家・谷文晁^{ぶんちよう}の弟）寛政11年（1799）・幕府蝦夷調査隊に随行の記録

※遠山^{かげみち}景晋（名奉行・遠山金四郎^{きんしろう}景元の父）寛政11年（1799）蝦夷地派

遣時の旅日記「未曾^{みそう}有記^き」・・・など

☆日光街道、通ったはずだけど、証拠がないヒト

○外国人

※イザベラ バード イギリス人女性 19世紀（明治時代）の旅行家。



明治11年に単身で日本国内を旅行、「日本奥地紀行」を書いた。日光街道を旅し、春日部に宿泊。

○日本人

※松尾芭蕉



「奥の細道」の紀行文を書いた。元禄2年（1689）3月、江戸を出発し、東北から日本海沿岸を歩き、敦賀^{つるが}から大垣で、おしまい。門人・曾良^{もんじん}が随行。江戸出発後、最初に泊まったのを、芭蕉は草加とし、曾良は春日部（粕壁）としています。

合宿と立場 <越谷の名前・こぼれ話>

「合宿^{あいじゆく}」。二つ以上の宿場が共同して宿場業務を負担することです。日光

街道では栗橋と中田^{なかだ}が利根川を挟んで合宿でした。日光に近い徳次郎^{とくじら}は上^{かみ}、中^{なか}、下^{しも}の3宿で10日ごとに業務を分担していました。

甲州街道では国領^{こくりょう}、下布田^{ふだ}、上布田、下石原、上石原の5宿が合宿。

大沢宿と越谷宿も当初は、一日置きの合宿だったのです。川を挟んだ宿場は合宿だったのでしょうか。

「立場^{たてば}」は、宿場と宿場の間で、旅人がお茶でも飲んでゆこうかという場所。

休憩所だから、立場には名物あり。越谷では草加宿と越谷宿の間の立場・蒲

生の名物は「焼米^{やきこめ}」、越谷宿と粕壁宿の間の立場・間久里の名物は「鰻」。箱

根駅伝で有名な「権太坂^{ごんたざか}」の名物は「牡丹餅^{ぼたんもち}」。

杖を立てるから、「立場」というとかー

越谷と越ヶ谷 <越谷の名前・こぼれ話>

日光街道の宿場名で「越ヶ谷」と書かれる場合と「越谷」と書かれる場合があります。昔は「越ヶ谷」だったと言われることもありますが、家康自身が「越谷」と書いていることもあります。昔の方々の「鷹揚^{おうよう}さ」で、些細^{ささい}なことにはこだわらなかったのでしょう。正式に「越谷」となったのは、昭和 29 年（1954）の町村合併の際に、市全体の名称を「越谷」としてからです。それ以前に制定されたものの官庁関係は（高校、小学校、地域名など）訂正手続きのことなどもあり、「ヶ」を入れたものが続いています。

「街道」か「道中」か <越谷の名前・こぼれ話>

言葉の厳密性を重んじた新井白石^{はくせき}は「海に面していないところの道に『海道^{かいどう}』という文字を使うのはおかしい」と考え、幕府に進言。幕府は享保元年（1716）4月15日に、「海道」＝（「街道」）という言葉を使わず、「道中」とするよう、正式な通達を出しました。しかし、明治時代以降、「道中」は公式には使われなくなっています。白石の進言に沿って、いまだに頑^{かたく}なに「日光街道」は「街道」ではなく、「道中」を使えというヒトよ！そんなことが、

⑧
いまの世の中で大事なのでしょうか。